

戦争を超えた交流写す

日露戦争（1904～05年）時に日本国内に収容されたロシア人捕虜の生活や待遇を記録した写真集「ロシア人捕虜写真コレクション」が復刻出版された。未発表を含む計453枚が掲載されており、花見、海水浴、相撲見物や温泉の浴衣姿など、全国で捕虜を厚遇した日本政府の方針が、ロシアの写真記録で裏付けられた。

日露戦争当時、ロシア兵捕虜

は青森から熊本まで29都市の収容所に約7万人が収容された。

写真はロシアの同盟国、フランスの領事が各地を視察して収集。報告書の付録として、ロシア国立映画写真資料古文書館が

保存していた。

平成17年に一部が公開されたのを機に、世田谷区経堂の東京ロシア語学院主事、藻利佳彦さん(59)が全容を調査した。

藻利さんは最初の収容所があった松山市出身で、ロシア人墓



⑤福岡県の海岸で海水浴(下道後温泉)で入浴後、浴衣姿でくつろぐ将校ら(いずれも写真集「ロシア人捕虜写真コレクション」より)



日露戦争時のロシア人捕虜の写真集復刻出版

地を遊び場に育ち、当時の捕虜について関心を持ったという。17年には捕虜研究などで露政府の文化勲章にあたる「プーシキンメダル」を受章した。

今回の発刊について、収容所の資料は各市史、個人蔵の写真などが現存するものの、全国を網羅した記録はないことから決めたという。

写真集は、到着、外出、儀式、病院、葬式、本国送還などを系統立てて分類している。当初は寺などに収容したが、捕虜が増え、千葉県などではバラックを建設。寺の一室をロシア正教の祈禱所にした写真と解説には、「日本政府が寺院の反発を抑え、捕虜の信仰を優先した様

子がよく分かる」(藻利さん)という。

道後温泉で入浴後、浴衣姿でくつろぐ写真や将校付きの料理人が調理する姿、日本人と食材を決める様子、読み書きを学ぶ兵士の姿なども撮影された。治療を受けたりコサックダンスを踊る写真は、戦場でロシア軍の戦意を喪失させる情報戦に用いられた。庶民の身なりなど、日本の風俗も伝えている。

藻利さんは「捕虜の待遇を定めたハーグ条約の順守は国策で、どの収容所も全力を挙げて対応した。戦争から離ればロシア兵でも同じ人間として対応した当時の人々に思いをめぐらせてほしい」としている。

同学院のロシア研究への募金者に謝礼として頒布する(1口5万円)。問い合わせは☎03・3425・4011。



写真集「ロシア人捕虜写真コレクション」を復刻出版した東京ロシア語学院の藻利佳彦さん